高齢者による高齢者のための生活支援「小さな仕事」技術講習会

NPO法人
北海道社会的事業所支援機構

北海道札幌市

取組のかたち

アクティブシニアに社会参加への場を提供
有償でサービスを提供する仲間の育成
高齢者へ制度外の生活支援サービスを提供

届けたい人たち

フルタイムでは働けないが
まだ働く意欲がある高齢者
体に少しづつ不自由を感じている高齢者

私たちの軌跡

札幌市で「アクティブシニア小さな仕事センター」を運営。包括支援センターとも連携し元気だが少し体が不自由になってきた地域の高齢者へ、介護保険制度外の生活支援サービスを有償で提供している。
有償サービスは「お家の困りごと」と「外出の困りごと」の二種類を提供している。
「お家の困りごと」としては、使わなくなった家具の移動廃棄、家の周りの除草、庭木の剪定等なんでも。
「外出の困りごと」として通院、買い物、役所等に同行する。
「小さな仕事センター」は意欲があればだれでも参加可能である。

私たちの新たな取組

「アクティブシニア小さな仕事センター」の生活支援サービスを担う仲間作りと、提供サービスのスキルアップを目指す取り組みである。具体的には、新聞広報や札幌市が行う町内会活性化事業と連携し、個別町内会ごとに、意欲ある高齢者向けに「介護保険制度外の生活支援サービスが地域を支える」こと、および具体的な提供サービス内容についての研修を実施し、生活支援サービスを担う人材の発掘を目指した。
スキルアップ研修として、庭木の剪定や重い家具などの安全な移動方法、窓ガラスの清掃手順などを実地で研修した。

現場での実践を通じて

新メンバーにとっては、これまでに経験したことの無い「ゴミ屋敷的な部屋の清掃」「重い家具移動」「除草」「庭木の剪定」などには当初は戸惑いがあったが、先輩シニアの指導で経験を積むことができた。
無理なく仕事への理解が出来た。
「アクティブシニア小さな仕事センター」の提供するものは高度なものではないので、意欲さえあれば、地域で求められる生活支援サービスを担うことが出来ることを実感していた。

取組の成果

私たちの新たな取組で、7名の新しい仲間が加わった。65才から84才までのアクティブな方々で、女性5名、男性2名であった。84才は女性の方であった。これらの方々の参加動機は、社会貢献そのものに興味をもって参加した方、社会参加と若干の収入を求める方など様々であった。
参加したい時だけ参加でき、不参加でも気持ちの負担にならないことがメンバーになる動機であるとの意見をのべていた。
既存メンバーも剪定などでスキルアップすることができた。

団体概要

団体名	NPO法人　北海道社会的事業所支援機構
代表者	石澤　利已
設立年月	2015年6月
住所	北海道札幌市中央区南8条西2丁目市民活動プラザ星園201
ホームページ	https://shienkiko.net
メッセージ	あなたの「チカラ」と経験を地域の中で活かしてください。

取組の様子

シニア男性の“老力”を活かすメンズ・シェッドの地域活動

札幌メンズ・シェッド
ポッケコタン

北海道札幌市

取組のかたち

「メンズシェッド＝男たちの居場所」づくり
各自の経験、知識、趣味を活かした活動

届けたい人たち

退職後の高齢男性（会員資格は50歳以上）
札幌市西区居住者が主な対象
受け身ではなく主体的に活動に参加可能な方

私たちの軌跡

菜園、DIYなど会員がやりたいことを話し合い、現在は11グループが活動している。また、総会、新年会、講演会も企画して会員全体が集える場所を提供し、会員はグループ活動に能動的に参加することで、高齢であっても各自が活躍できる場としている。菜園グループは地域内の段々畑を借り、ソバなどを栽培し、遊休農地の活用と同時に地域交流を進め、団体としては国内（熊本県）、英国、豪州などのメンズシェッドとの情報交換を通じて、活動をいかに定着、発展させるかを常に考えている。発足には大学の保健科学研究者も関わっており、シェッド活動が高齢男性の肉体的、精神的健康に及ぼす効果を科学的に検証している。

私たちの新たな取組

本事業では、これまでのグループ活動を発展させるのに加えて、特に地域や世代間交流を目的に新たな取り組みを行った。1）陸稲、ソバの収穫期に地域保育園の子供たちと収穫祭を実施し、収穫体験、収穫物による食事会を開催した。2）「大人食堂」を開催し、メンバー以外の地域住民とも交流を深めた。3）地域に生息する野生動・生物（キタキツネ、マダニ）を研究する大学研究者を招き地域交流講演会を開催した。4）国内外メンズシェッドの交流促進のため、熊本県水上村との情報交換、英国、豪州シェッド視察報告会を開催し、スコットランドのメンズシェッドとは姉妹協定締結と国際交流資金獲得などを行った。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

仕事中心だった人が退職後、地域社会に溶け込んで新たに人とのネットワークを築くのは難しい。当団体は高齢男性が地域社会にソフトランディングできる組織、いつまでも元気に自分らしさを発揮できる組織を作ろうと札幌市西区を中心に会員募集を行い、2024年4月に発足した 。「ポッケコタン」はアイヌ語で「温かい家」を意味し、その言葉通り、温かい人間関係を築き、充実した人生を送れる場を作ろうと活動を始めた。設立総会（当初会員数41名）で、各自のやりたい事について話し合った結果、7つの活動グループが形成され、各グループは月1～2回程度の活動を自主的に行っている。

立ちはだかった壁と、乗り越えた日

集いの場所を確保することが重要と考え、発足当初には地域内企業の理解を得て「基地」を設置し、グループミーティング、講演会、町内会との交流などを実施でき、順調な滑り出しができた。しかし、翌年には諸般の事情により「基地」を閉鎖せざる得ず、以降は公共施設で活動を継続している。「気軽に集まれる場所」を失ったため、会員間の交流がやや滞ったことは否めない。しかし、「基地」に閉じこもらず継続的な活動を行うことが、シェッド活動の普及につながり、地域からも受け入れられる環境が整備されると考えている。逆境を跳ね返すことでメンバーの結束も強まるというポジティブな思考で活動を進めていきたい。

取組の成果

シェッド活動に参加することで、閉じこもりがちであった会員も、「自分のやりたいことを見つけて外に出る機会が増えた」、「新たな友人関係を築くことができ、肉体的、精神的にも健康になった」と感じる会員が多い。2年間にわたる健康科学的調査も継続中であり、その結果は近く公表される予定である。新聞、テレビでも本シェッド活動が取り上げられ、高齢者の孤独・孤立解消策として有効な方策の一つとして全国的にも注目されている。会員数は41名から47名に増加し、徐々にではあるが活動が広がっている。札幌市近隣でもシェッド設立の動きがあることから、今後は新規団体とも連携して、活動をより発展させたい。

団体概要

団体名	札幌メンズ・シェッド　ポッケコタン
代表者	山田一雄・杉本千尋
設立年月	2024年4月
住所	北海道札幌市西区西野1-1-7
ホームページ	https://pokke-kotan.jimdosite.com
メッセージ	気軽に集まれる「男たちの居場所」

取組の様子

1.北海道庁赤レンガプラザでの活動紹介 (2025.9)
2. 大人食堂（2025.11 *10+32名)
3. 地域交流講演会：マダニに関する話題 (2026.1 *21+26名)
4. 地域交流講演会：キタキツネとエキノコッカス症を
学習するボードゲーム (2026.1 *21+26名)
5. 子供たちとの稲刈り (2025.9 *12+18名)

*参加者数（会員+会員外）

室蘭初オンライン＋リアル連携による ひきこもり支援モデル

特定非営利活動法人
くるくるネット

北海道室蘭市

取組のかたち

LINE相談
バーチャルカフェ
ひきこもりがちな人のためのやさしいカフェ

届けたい人たち

外出が困難なひきこもり当事者
若年層～中高年層（20～50代を想定）
孤立・孤独状態にある地域住民
必要に応じて家族や支援者も含む

私たちの軌跡

2004年の設立以降、ICTを活用した支援から始まり、2023年から職業訓練事業が始まった。その後は、コロナ禍で、いろいろな人との関わりが少なくなっていることがきっかけとなり、室蘭市を中心に子どもの居場所づくり、子ども食堂、放課後等デイサービスをはじめ、就労継続支援B型事業を継続的に実施してきた。
クルハウスという居場所を持ち、月1回クルハウスまつりや週2回子ども食堂を行い地域の方も立ち寄れる場となっている。

私たちの新たな取組

LINE相談（AI自動応答×パート相談員による24時間LINE相談）を入口に、バーチャル・コミュニティカフェへ誘導。オンラインで得られた居場所感を“子ども食堂大人の部”でのリアル体験へとつなぎ、最終的に就労継続支援B型プログラムへの移行を目指す。現在のクルハウスのリソース（子ども食堂や就労継続支援など）を活用。
8～10月はLINE相談開始、オンライン基盤（AI自動応答、バーチャルカフェ）の検証、11～1月にリアル（子ども食堂大人の部）とB型連携を段階的に拡充し、孤独・孤立の解消から社会参加までを一貫支援する。

うまくいかなかった時の工夫と試行錯誤

当初はLINE相談→バーチャルカフェ→就労という流れだったが、LINE相談から次の段階へ移行することが難しいケースが多く見られた。特に、相談内容が深刻であったりする相談者にとっては、バーチャルカフェへの参加が心理的負担となることが分かった。支援の流れを見直し、LINE相談は継続的な見守り・相談支援に特化することとした。また、就労や社会参加につながる入口として予定していたバーチャルカフェおよび対面での交流は、少人数制の交流の場として再構成し、話し合いにとどまらず、お菓子作りなどの活動を取り入れた内容へ変更した。あわせて、名称を「やさしいカフェ」とし、別枠で実施することとした。

取組の成果

LINE相談を軸とした孤独・孤立対策の基盤をくるくるネットとして構築することができた。AIを活用したLINE相談システムの導入により、深夜帯を含む24時間対応が可能となり体制が強化された。その結果、相談者数は76名となり相談件数は100件を超えた。「やさしいカフェ」を4回実施し、参加者延べ8名であったが安心して話せる居場所の有効性を確認した。参加者からは気軽に話せてよかったという感想もあった。
バーチャルカフェはLINE相談の具体的な面談の場とした。今後は、LINE相談を継続していき、対面支援や交流の場へ柔軟につなげる体制を強化していく。

団体概要

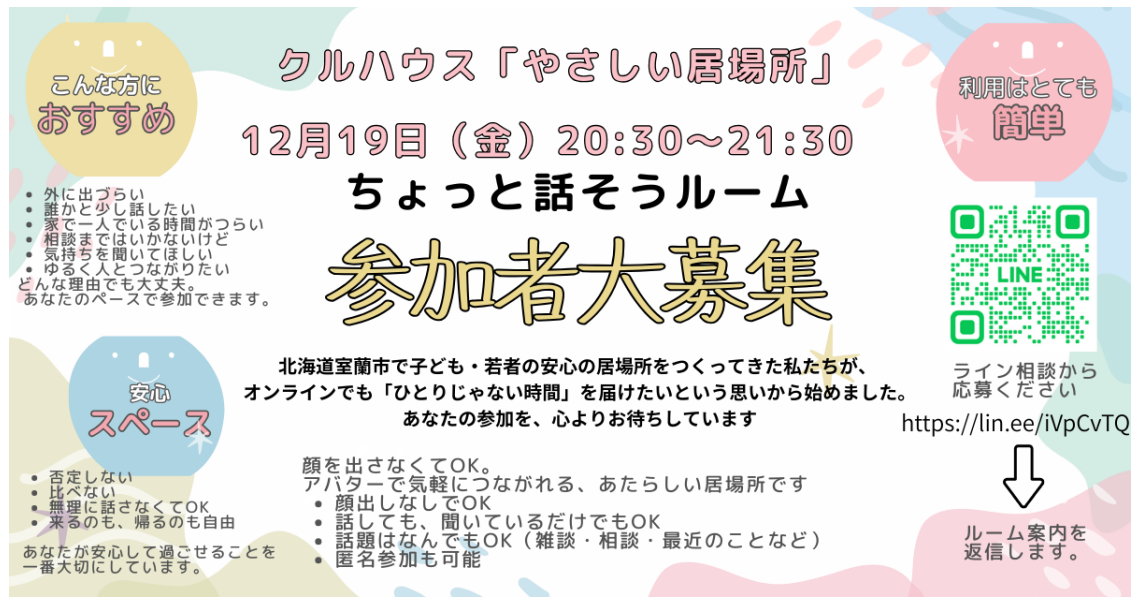
団体名	特定非営利活動法人くるくるネット
代表者	鳥山晃
設立年月	2004年5月
住所	北海道室蘭市知利別町2－22－31
ホームページ	https://www.kuru2.net
メッセージ	私たちは、子どもや大人が孤立せず、安心して「つながれる居場所」を地域につくることを目的に活動しています。LINE相談ややさしいカフェを通じて、一人ひとりの声に寄り添い、無理のない支援を大切にしています。

取組の様子

【ライン相談チラシ】

【交流カフェチラシ】

【交流カフェ写真】



【バーチャルカフェチラシ】

誰でも来られる何もしなくていい居場所「あおむしルーム」

特定非営利活動法人
ワークフェア

北海道北見市

取組のかたち

属性を問わず、申し込みも登録も不要
誰でも来られて何もしなくていい
常設型の居場所の実施

届けたい人たち

社会とのつながりが希薄になりがちな層だけでなく、すでに福祉サービスにつながっている方々、または声を上げにくい若年層など、幅広に対応

私たちの軌跡

孤立や貧困、ひきこもりなど様々な事情で意欲を失ってしまったり、生きにくさや困難を抱えている方々が力を取り戻すためのサポートを始め、居住支援、就労支援、子どもの学習支援など、多様な層へ幅広く支援を届けている。
具体的にはあおむしルームのような居場所を提供するサービス、地域の女性にフォーカスしたつながり支援の活動、地域の幅広い方への就労の支援の活動など幅広い支援を行っている。また、北見市だけでなく周辺の自治体で活動する機関や団体とも連携を取ることで、網走管内の方々へと支援の幅を広げている。

私たちの新たな取組

どんな人でも社会的に孤立した状況を生まないために、常設型の居場所の実施を通して地域住民や専門家が継続的に関わる体制を構築する。基本は利用者の属性を問わないが、曜日によって特定の属性（性自認、若者など）を対象とし、一時的に避難が可能な宿泊機能を持つ居場所（あおむしルーム）を整備している。
あおむしルームにはカードゲームや折り紙などを準備しており、利用者が繋がりやすいきっかけを提供することで、利用者同士の自発的なつながりの創出を目指している。また、人には聞かれたくない悩みを専門家に話せる場として個室も用意しており、訪問した際に相談もできる環境にしている。

この取組があったからこそ

市内の就労継続支援事業所B型から紹介でつながった30代女性。市役所から就労として紹介があったが、本人の話を聞くと、相談する相手もなく困りごとをたくさん抱えて、生きる気力も落ちてしまっている。まずはそちらにつながって、エネルギーを取り戻してほしいということだった。
昼夜逆転の生活だったが、あおむしルームを利用するため昼に起きるようになり、日々のちょっとした相談や自分の今後について話をしていく中で、「変わりたい」という気持ちが大きくなっていった。現在は社会的居場所づくりのプログラムで内職に参加。毎朝、起きられるようになり、B型を目指して相談支援専門員にもつなぐ予定が決まっている。

取組の成果

申込やプログラム等に参加しなければならないということがないのは「気楽でいい」という声が多く、10代から80代まで幅広い層が利用している。今年度7/1～1/28まで141日実施。当該期間における利用延べ人数は1113人であった。年代別内訳は、10代3人（0.3%）、20代275人（24.7%）、30代401人（36.0%）、40代295人（26.5%）、50代57人（5.1%）、60代8人（0.7%）、70代60人（5.4%）、80代12人（1.1%）、90代2人（0.2%）となっています。男女の比率もほぼ半々であった。
地域の関係機関からの紹介や、見守り依頼もあり、福祉サービスと居場所を行き来しながら、社会参加の機会を増やしていくケースもあった。利用者同士の繋がりも生まれており、今後も取り組みを継続していく。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人 ワークフェア
代表者	柳谷　君予
設立年月	2011年12月
住所	北海道北見市美芳町5丁目2-13　エムリンクビル
ホームページ	https://info140929.wixsite.com/workfare
メッセージ	私たちは「すべての人に安心できる居場所と出番があり、希望を持って踏み出せる社会」を目指しています。

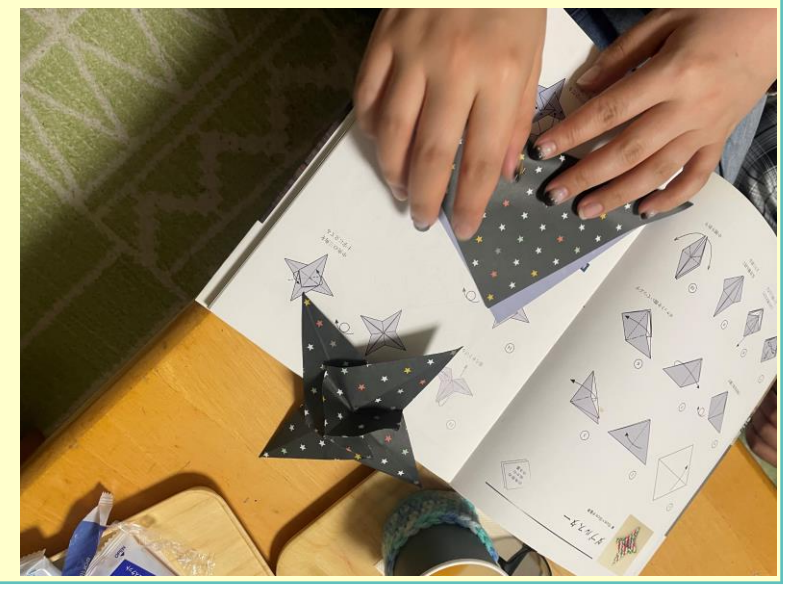
取組の様子

（左）団体の広報誌の発送準備を手伝ってくれています。
未経験の内職作業に恐る恐るだった方も徐々に慣れて、手早く作業していました。

（右）居場所は続きの二部屋ですが、完全に話題が分かれるわけでもなく、ゆるやかに同じ空間として話題も流れています。

（上・下）女性限定の日はハンドメイドを楽しみながら雑談をすることが多く、画像は刺し子刺繍に初挑戦しています。
作りかけを置いていって、何日かかけて完成させていく人や本を見ながら難しい折り紙をしたり、それを見て一緒に折ってみたり。賑やかな女性の日です。

（左）月に1度は仕事終わりに、近隣の関係機関の方が座談会形式で集まっています。
まじめな話題から日頃のガス抜き、新しいつながりや連携が生まれる場にもなっています。



北海道留萌市での孤独・孤立を防ぐ教育と福祉の連携モデル事業

特定非営利活動法人
ウィーズ

北海道留萌市

取組のかたち

LINE相談窓口を官民連携により運営
（NPO法人ウィーズ･教育委員会･企業）

届けたい人たち

留萌市の小中学生
（小学校4年生～中学3年生）

私たちの軌跡

ウィーズは、『ひとりひとりが価値ある自分を信じられる社会』の実現をビジョンに、家庭で生きづらさを抱えるこどもひとりひとりの状況や気持ちに応じた伴走支援を千葉県を拠点に行ってきた。
2019年に開始したLINE相談を入口とし、対面で過ごせる居場所「みちくさハウス」を運営している。あわせて、親の離婚に伴う親子交流（面会交流）支援、支援に携わる人材の育成事業も展開している。
2024年からは、こどもひとりひとりの興味・関心を叶えるために、地域の大人とこどもが長期的な関係を築くことを目的としたエブリリーフ事業にも取り組み、こどもを支える社会的なつながりを広げている。

私たちの新たな取組

留萌市では、こどもの悩み相談支援を実施するNPOが都市部と比べて限られている現状を踏まえ、当団体、留萌市教育委員会、Edv Future株式会社の三者が連携し、こどもたちの孤独・孤立を未然に防ぐ「教育と福祉の連携モデル」を構築した。具体的には次の2点を柱とした。①LINE相談窓口「留萌みんなの相談」の運営：匿名・無料での相談を24時間受け付けし、学校外でもこどもが安心して相談できる環境を整備するとともに、専門相談員が寄り添う体制を整えた。②多職種連携：自治体（教育委員会）と連携し、個別対応のケース会議を実施。教育委員会・学校との情報共有を通じて、学校現場での具体的な支援体制を構築した。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

当団体は、千葉県を拠点に活動しており、松戸市で居場所施設『みちくさハウス』を運営している。このため、LINE相談を窓口にして、同施設の緊急利用・一時利用につなげて多角的な支援を行うことが可能である。一方、千葉近郊以外の地域では、LINE相談を寄せられても、遠隔であることから、それ以上の支援を届けることが難しい状況であった。そこで、遠隔地であっても、事業地の自治体や学校などと連携することで、LINE相談を展開しながら、さらに必要な支援を届けることができると考え、本事業の開始に至った。今後は事業地の人材育成にも力を入れ、地域に根づいた支援を展開していく。

成功のカギとなった工夫とひらめき

こどもたちにとって、家庭や学校をはじめ、どのような悩みでも相談できる相談窓口とした。また、案内するチラシとカードには留萌市の地域キャラクターを使用するなど、地域に親しみやすいデザインを意識した。
当団体が通常行うLINE相談では、遠隔地のこどもとは対面で繋がることが難しく、支援の選択肢に限りがあるが、本事業では教育委員会・学校と連携し、担任の先生やスクールカウンセラーとも情報共有を行うことで、支援が必要なこどもに対して、より具体的なアクションやフォローが可能となり、解決の糸口を見いだせたケースがあった。

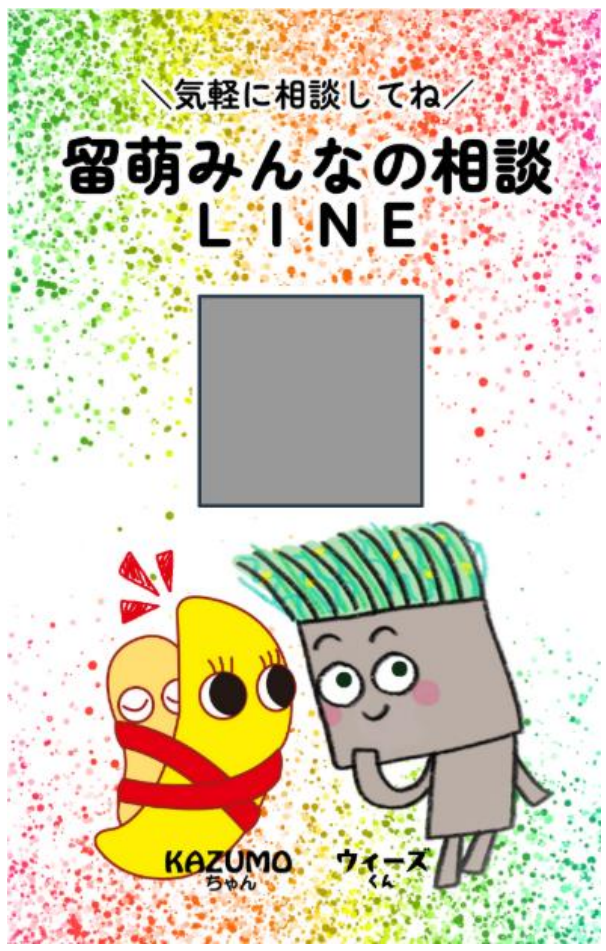
取組の成果

事業基盤の整備を経て、2025年10月から本格運用を開始した。
市内全7校の児童生徒約700名に、各担任の先生からチラシ・カードを配布し、説明・周知を行った。
「死にたい」といった深刻な相談が寄せられた際にも、教育委員会と密に連携を取り合う体制が構築され、学校現場での具体的な支援に迅速につなげることができた。
相談件数は月数件ペースで推移しており、一つひとつの相談に丁寧に対応している。今後も、留萌市と連携を継続し、相談支援を行うとともに、地域内での専門相談員の養成も視野に入れ、支援を展開していく。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人 ウィーズ
代表者	光本　歩
設立年月	2016年3月
住所	千葉県鎌ケ谷市くぬぎ山4-11-28-101
ホームページ	https://we-ed-s.com/
メッセージ	オンラインでの支援において、自治体・学校と連携し、こどもたちと繋がりながら悩みを聴き、支援を行う新たな活動の形を実現することができました。今後、事業地との連携を深め、地域でこどもたちを支える市民活動の活性化にも貢献していきます！

取組の様子



市民主体による「ゆるやかにつながるワクワク活動」の創出

社会福祉法人
北海長正会

北海道北広島市

取組のかたち

〈対話×継続〉でつくる健康な居場所モデル

届けたい人たち

男性高齢者
女性高齢者

私たちの軌跡

当法人は、平成24年に閉校した旧緑陽小学校を活用し、平成26年より「北広島団地地域サポートセンターともに」を運営している。高齢者福祉サービスや高齢者住宅の提供に加え、体育館や活動室、キッズコーナー等を備えた地域交流拠点として、子どもから高齢者、障がいのある方まで、誰もが日常的に集える場づくりを行ってきた。また、市民ボランティアである「ともに市民スタッフの会」と協働し、喫茶コーナーの運営や健康体操、地域運動会などを継続的に実施している。制度サービスにとどまらず、住民主体の交流と支え合いを大切にしながら、地域・行政と連携し、誰もが安心して暮らせる地域づくりを進めている。

私たちの新たな取組

退職後、地域とのつながりが乏しくなり、外出機会の減少による筋力低下や孤立が課題となっている高齢男性を対象に、「俺の健康マルシェ」と題した連続講座を実施した。「健康」をテーマに、口腔ケア、判断力維持、栄養など多様なテーマを設定し、継続的な参加を通じた意識変容や、参加者同士の関係性づくりを目的とした。
一方で、参加への心理的ハードルを下げるため、開催回ごとに出欠を選べる柔軟な運営とした。グループワークでは職員がファシリテーターとして関わり、対話を促進することで、参加者同士の交流が活発化した。

男性も気軽に立ち寄れる居場所を！

あえて男性のみに対象を限定することで、同性のみの安心感と連帯感のある場が生まれ、初参加の方も発言しやすい雰囲気づくりにつながった。健康に関する意見交換にとどまらず、参加者自身が関わっている地域活動や日常の取組についても情報共有が行われ、自然な形で関係性が深まった。
また、LINEを活用して講座情報や活動写真、動画、次回予定等を発信することで、講座への関心を高め、参加への心理的ハードルを下げるとともに、参加者同士の継続的なつながりを促進した。さらに、講座終了後には地域食堂での食事会や懇親会を実施し、居場所としての定着を図った。

取組の成果

男性向け講座「俺の健康マルシェ」（全11回）、女性向け講座「マダムの健康マルシェ」（全7回）を開催、計46名が参加。継続的な講座参加やグループワークを通じて参加者同士の関係性が深まり、孤独・孤立を感じやすい高齢者が“安心して人と関われる居場所”として機能し始めた。また、参加者が自身の経験をもとに他の参加者へ声をかけることで新たなつながりや社会参加のきっかけが生まれ、地域包括支援センター職員の関与により相談支援につながるケースもみられるなど、孤独・孤立の予防や早期対応の観点からも有効な取組となった。今後は、講座修了後の活動や役割づくりを通じて、継続的な孤独・孤立対策へとつなげていく。

団体概要

団体名	社会福祉法人　北海長正会
代表者	理事長　三瓶　徹
設立年月	1976年9月
住所	北海道北広島市富ヶ丘509ー31
ホームページ	https://hokkaichouseikai.jp/
メッセージ	市民ボランティアや地域住民と協働し、対話や小さな活動を積み重ねることで、孤独・孤立を感じやすい人が安心して人と関われる環境づくりを大切にしていきます。

取組の様子

宮城県刑務所出所者等の体験格差の補完による孤独孤立予防事業

特定非営利活動法人
Switch

宮城県全域

取組のかたち

社会内更生保護における関係機関との連携
経験格差を埋める体験学習の企画・運営
専門性を持つスタッフによる個別伴走型支援

届けたい人たち

地域に帰住し再出発を目指す
保護観察対象者等

私たちの軌跡

私たちの歩みは、こころに不調を抱える若者を対象にした福祉サービス事業から始まった。その後、制度や支援の枠組みからこぼれ落ちる若者たちと出会い、その支援へと活動を広げてきた。
進路に悩む高校生や大学生。オンラインの世界で孤立する若者。自死リスクを抱えながらも日常を懸命に生きる学生たち。ストレスの中で立ち止まっている人。そして、少年院や刑務所を出たあと、地域の中で孤立し、再犯のリスクを抱える人々ー。彼らが落ちてしまう“地域の小さな穴”に、私たちは目を向け、ひとつひとつ丁寧に埋めるような支援を行ってきた。

私たちの新たな取組

刑務所出所者等の孤独孤立予防に特化し、宮城県内で少年院や刑務所の出所後に地域で孤立しがちな方々が、同じ目標を持つ仲間と「さまざまな体験格差を埋める活動」にとりくむことで、地域で孤立し、ふたたび犯罪を犯すリスクを軽減している。活動と並行して専門性の高いスタッフが「個別の生活上の困りごと相談」を受けることで、中長期的な地域社会での自立を目指し、地域における息の長い支援のあり方を検討している。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

私たちは、2011年から若年層を中心とした「生きづらさ」を抱える人々の支援に取り組んできた。2024年、法務省保護局の協力の下、県内の更生保護機関等と連携し、働き続けることに課題を抱える刑務所出所者等の就労・職場定着を目指す、宮城県刑務所出所者等就労・定着ネットワーク事業「リ・トライ！」を開始した。個別伴走型支援、居場所プログラム実施など、様々な活動をする中、彼らの背景にある「体験格差の影響の大きさ」という気づきがあった。そのため、仕事や生活に必要な知識・スキルに加え、「孤立×再犯リスクの低減」に向けた取組として、様々な体験学習を企画し、機会の提供につなげている。

地域のつながりの見直し

「リ・トライ！」並びに「体験格差の補完による孤独孤立予防事業」の取組では、法務省保護局、仙台保護観察所、特定非営利活動法人宮城県就労支援事業者機構、日本財団職親プロジェクト宮城支部、更生保護法人宮城県更生保護協会など、更生保護機関にとどまらず、地域の医療福祉関係者、保護司や更生保護女性連盟、法務省矯正局、内閣府、自治体の再犯防止の部署、更には地域の企業、学生・個人のボランティアなど、広く応援の輪が広がっている。地域全体で支えることが再犯を防ぎ、中長期的に誰もが住みやすい社会をつくるというビジョンを共有し続けるからこそ、応援の輪が広がっているものと感じている。

取組の成果

2024年6月～2025年12月末時点で、登録者62名、のべ参加者230名、のべ相談件数535件を数える。同期間で、実施した体験学習が6回（29名）、講座プログラムが20回（201名）。参加者への、受講奨励金やふうどばんく東北AGAINからの食料支援も参加を後押ししている。
地域ネットワーク作りにおいては、行政機関主催の再犯防止関連のセミナー類や、更生保護関連の研修会、本事業主催のネットワーク会議など、県内外で開催される機会に恵まれ、本取組を広く共有でき、理解者・応援者が増えている。年度末には取組を冊子にまとめ、ツールとして活用し更なる周知を目指す。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人 Switch
代表者	今野　純太郎
設立年月	2011年3月
住所	宮城県仙台市宮城野区榴岡　1-6-3　東口鳳月ビル6F
ホームページ	http://switch-sendai.org/
メッセージ	若者のwell-being-lifeの実現を応援します。Switchは、若者一人ひとりが持つ力や強みをいかした「働く・学ぶ」の実現に伴走し、well-beingな社会を目指す団体！

取組の様子

体験学習のお知らせと
ビーチクリーン活動の様子

上段：11/8実施の料理教室　下段：ニュースポーツ体験

実施レポート掲載先：https://retry-miyagi.org/program/report.html

石巻地域の10代女子親子セラピープロジェクト

特定非営利活動法人
まなびのたねネットワーク

宮城県石巻市

取組のかたち

高校生・若者の居場所とつながりづくり

届けたい人たち

孤独感や生きづらさを抱えた
10代の女子高生・若者たちと保護者

私たちの軌跡

2022年5月より、石巻の中心部に、高校生や若者が主役となるみんなのお家（居場所）「しゅろハウス」をオープンした。平日週3回（月・水・金）16:00-21:00は、ホッとできるスペースとして、各週末にはイベントを実施している。居場所での過ごし方は様々だが、メインはみんなで夕食を作って食卓を囲んで団欒をすること。お腹が満たされれば、自然と本音が出やすくなり、気づけば悩み相談であったり、みんなでゲームやカラオケ、おしゃべりなどを楽しんだり、時には講師を呼んで学びの時間を設けている。週末は、みんなの「やりたい」をカタチにすることを実施している。

私たちの新たな取組

本事業では、これまで居場所に来られなかった層をターゲットに、こちらから足を運んだり、「しゅろハウス」以外で場づくりを行うことで、新たな人たちと出会う機会をつくった。
10代や若年層は、なかなか相談することさえも難しかったり、困りごとに気づきにくいという実態を踏まえて、不安解消と社会的・心理的なつながりづくりのため、多様な癒しと学びの場の提供と体験、交流の機会を創出した。また、高校生や若年層と接しやすい「癒し」をキーワードにセラピーイベントを実施した。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

「しゅろハウス」をオープンしてから、不登校の女子中学生の保護者や所属のない10代の支援者から相談が入るようになった。小学校の時に男子にいじめられてから家に一人でいるという15歳の中学3年生や所属のない繊細な16歳という孤立していた女の子たち。思春期という言葉で片付けられない程、多くの課題を抱えていた10代に出会い、彼女たちが安心して過ごせる、少しでもホッとできる場と関係づくり、そして未来につながる体験が必要なんだと気づき、プロジェクトを始めた。

“ここがポイント！”現場発の知恵

10代や若年層と接した際、ただ「話を聴きます」という姿勢だけでは、相談どころか話すことさえも難しい実態があった。そこで、ハンドマッサージ、足湯、ヨガといった体を癒すアプローチを行ったところ、心もほぐれるからか自ら話してくれるという子たちがいた。結果として、それが悩み相談になったり、本音を語れる場になったり、温かい関係づくりにつながった。そこで、カウンセリングスキルを持つ専門性のある方々に癒し系イベントに参画していただき、1対1または少人数での相談が可能となり、本人たちの心が軽くなったり、悩みを持つ子の発見につながった。

取組の成果

「しゅろハウス」で週末イベントとして実施した際は、同じ若者が平日とは異なる姿を見せるようになった。また、高校のスクールソーシャルワーカーからの相談も相次いでいる。中退した生徒や虐待を受けている生徒を紹介してもらい、アウトリーチやSNSで繋がりを保てていたり、制度の狭間に立たされている10代女子の孤立化を防ぐことができている。さらに、東日本大震災の被災地である石巻市にある県内唯一の公立女子高で、冬休み前に大きなイベントを実施することができた。多様な地域団体と連携しながら、女子高生がワクワクするような内容を盛り込み、生徒の1/4が参加する大きなものとなった。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人まなびのたねネットワーク
代表者	代表理事　伊勢　みゆき
設立年月	2007年2月
住所	宮城I県仙台市若林区卸町2丁目9-1
ホームページ	https://manabinotane.net
メッセージ	石巻地域の高校生や若者と接していると15年経った今も東日本大震災の影響を色濃く感じます。「生きていてくれてありがとう」と心から伝えたいです。 そんな子たちを一緒にサポートし、育てていきましょう！！

取組の様子

遊休農地の活用による心を繋ぐ地域共生コミュニティ創り

一般社団法人
WATALIS

宮城県亘理町

取組のかたち

地域課題解決型の実践活動
（竹林整備・遊休農地活用）
体験型交流プログラムの実施

届けたい人たち

孤立しがちな高齢者、障がいのある方、
メンタルヘルスに不安を抱える方
多世代の地域住民（子育て世代、学生等も含む）

私たちの軌跡

2011年の東日本大震災後、地域の女性たちが一歩を踏み出すきっかけ作りとして設立した。
着物のリメイクを通じた「ものづくり」の場を提供し、伝統文化の継承と女性の社会参加を支援してきた。
近年はコミュニティカフェの運営も行い、ものづくりワークショップとお茶会の開催による語らいの場創りに取り組みながら、地域の遊休農地を活用した養蜂や里山整備も実施。交流と地域貢献の取り組みを通して、多様な構成員が職業や世代を超えて繋がる新たな地域コミュニティ創りに取り組んでいる。

私たちの新たな取組

担い手不足により耕作されない遊休農地と竹が繁茂する里山を活用し、体験型プログラムを実施。
地域の自然環境について学び、景観維持と環境保全を促進するための実践活動を行った。
体験プログラム（延べ14回）と実践活動（延べ28回の計画を大きく上回り57回）を実施。ミツバチ観察会や蜜源植物の栽培、蜜源植物を探すフィールドワーク、竹の伐採と竹炭づくりに加えて、コミュニティファームでの野菜栽培や収穫体験も実施。自然に触れながら世代を越えて多様な人たちが交流する機会を創出した。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

東日本大震災の被災地である亘理町では、担い手不足により荒廃していく遊休農地や、生活環境を脅かす竹害（竹林の拡大）という地域の深刻な課題に直面している。これらを単なる「厄介もの」ではなく、新たな役割を持つ「地域資源」として捉え直すことができるのではないかと考えた。
遊休農地や竹林を、孤独・孤立や生きづらさを感じている人たちの交流の場として活用。地域課題の解決と居場所づくりを両立させ、参加者が地域づくりに貢献しやりがいを感じられる活動を目指し本事業をスタートさせた。

共に進む仲間を作るための工夫

互いに「教えあう」「学び合う」関係性が育まれ、次の活動にも継続して参加する意欲を持てるような内容や雰囲気づくりを心掛けた。
ブルーベリー農園を会場とした蜜源植物を探すフィールドワークでは、参加者同士で樹木の名前を教え合う姿が見られ、「来年の開花時期に再訪したい」という声も上がり、次へと繋がる楽しみが生まれた。
自然と触れ合う時間が参加者に静かな感動と安らぎを与え、世代を超えた「つながり」を育む大切な機会となった。

取組の成果

ヒアリング調査の結果、参加者のほとんどから「満足」「楽しかった」との回答を得た。回を重ねるごとに参加者同士が自然にあいさつを交わすようになり、笑顔で声を掛け合う姿も見られた。
自然と触れ合うことができる屋外での活動は、癒しや安らぎを感じやすい環境であり、作業をしながら自然に会話も生まれ、参加者の孤独感を和らげることに寄与できたと感じている。
竹炭づくりの活動中に、近隣住民から「竹林が獣の通り道になっているので、ぜひ整備を続けてほしい」と感謝されるなど、参加者が自らの地域貢献の成果を感じ、自己肯定感向上に繋がる場面も見られた。

団体概要

団体名	一般社団法人 WATALIS
代表者	代表理事　引地　恵
設立年月	2013年4月
住所	宮城県亘理郡亘理町字中町22番地
ホームページ	http://watalis.jp/
メッセージ	世代や障がいの有無、性別にとらわれない温かな人間関係作りを目指している。 住民自らが実践活動を継続することで、交流の場を守り、参加者のやりがいや地域への貢献に繋がる循環を目指している。

取組の様子

緊急一時支援施設を整備しつつ、平時の地域の居場所と連携して、早期に孤立困窮からぬけられる仕組みづくり

特定非営利活動法人
茨城NPOセンターコモンズ

茨城県常総市、県全域

取組のかたち

課題を抱えた外国籍の方の住まい、
心身の回復、在留資格等の問題を
連携してサポート

届けたい人たち

外国籍のDV被害者
労働搾取等から避難してきた技能実習性

私たちの軌跡

コモンズは水戸で1999年からNPOの中間支援の活動をしてきた。2008年のリーマンショックで代表の横田が住む常総市で多くの日系ブラジル人が仕事を失い、子供たちがブラジル学校から市内の公立小中学校に移り、苦労していた。そこで常総事務所をつくり外国ルーツの子や家族支援を開始。2015年9月の鬼怒川洪水で事務所も含め多くの家が浸水被害にあった。この災害からの復興事業として空き家を福祉転用することをはじめ、多文化保育園やコミュニティカフェ、シェアハウスの運営を始めた。

私たちの新たな取組

シェアハウスには、夫のDVで避難してきた外国籍の母子を受け入れている。従来は、住まいの提供、生活保護の申請支援、通院同行、子がいる場合の保育、離婚や入管手続きに関する弁護士と連携した支援を行ってきた。本事業では、離婚後も日本で生活していくことを見据え、当団体の畑やカフェでの仕事を通じて生活リズムを整えるといった心身の回復、日本語の習得、そして働く力とともに在留資格を得るために特定技能試験の学習支援を実施。また、お祭りへの参加や料理教室の開催等、地域との交流も図った。さらに、他団体と連携し、労働搾取やいじめで苦しみ避難してきた技能実習生の受け入れも開始した。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

これまでも外国籍のDV被害者を受け入れてきたが、今後の生活に不安が募り夫のもとに戻ったり、引きこもり生活となったりと自立につながらないケースがあった。避難してきた方々が次の人生を自身で切り開いていくためには、ただ住まいを提供するだけでなく、日本語の習得や安定した在留資格の取得等、地域に定着するための力をつけていく支援が必要だと考えた。取組を通じて、国籍も課題も異なる人が地域で共に暮らしていくことを目指した。

関係機関とのチームワークの作り方

外国籍の方が持つ課題は労働問題から在留資格、教育や医療など多岐にわたる。そのため、多種多様な機関との連携が不可欠である。例えば、DV被害者については、離婚調停や在留資格の更新手続きを弁護士が担当。技能実習生については、職場の労働問題の解決と職場探しはユニオンが担った。そのほか、家賃等お金に関することは他の支援団体や行政が生活保護制度で対応をした。そうした中で、当団体は日々の見守りや生活の支援、通院同行、日本語学習や特定技能試験受験のための支援、地域との交流企画等を担った。

取組の成果

本事業で支援をした外国籍のDV被害者については、離婚をして配偶者ビザを失っても日本に残れるよう特定技能の試験を受け、在留資格を変更することを目指したが、まだ成功に至っていない。引き続き支援をしていく。技能実習生については、労働問題を解決するとともに心身の回復も図ることができ、職場に復帰することができた。日本では、外国籍のDV被害者や職場での搾取やいじめにあい、苦しんでいる技能実習生、そしてそれに耐えられず失踪してしまう方々が沢山いる現状がある。本事業を通じて、住まい、経済的支援、法的支援、就労支援、医療支援等を組み合わせた支援モデルをつくることができた。

団体概要

団体名	認定特定非営利活動法人　茨城NPOセンターコモンズ
代表者	横田　能洋
設立年月	1999年4月
住所	茨城県常総市水海道橋本町3571
ホームページ	http://www.npocommons.org
メッセージ	常総市で、人的多様性と空き家を活用したまちづくりを実践し全国に発信します

取組の様子

女性たちの地域づくり活動による栃木の孤独・孤立対策

特定非営利活動法人
宇都宮まちづくり市民工房

栃木県宇都宮市など

取組のかたち

つながりの場づくり…
地域課題への取り組みを通じたつながりづくり
ともに取り組む仲間づくり…
地域で活動する団体への支援

届けたい人たち

孤独・孤立に苦しむ人の支援に取り組む団体
子育て中のパパ・ママ
悩みの相談先が見いだせない市民
被災地の方々

私たちの軌跡

私たちは、「市民主体のまちづくり」実現を使命に2005年に法人として活動をスタートした。
これまでの主な活動は、1）中間支援センターの管理運営：宇都宮市において、官設民営のセンター業務に20年間携わり、多くの市民活動団体との絆を深めてきた。2）調査研究：コミュニティビジネス、こどもの貧困、こども食堂などのテーマで、調査研究を進めて、結果を冊子等にまとめてきた。3）各種協働事業：まちづくりに関わる団体と協働事業を実施、あるいは中間支援組織としてサポートしてきた。
これらの取組を通して、市民主体のまちづくりに貢献してきた。

私たちの新たな取組

本事業では、すでに連携の実績がある団体を中心に、地域づくりの協働プロジェクトA～Cの実施を支援した。関わりの冒頭でインタビューを行い、各団体の活動の実態や活動の中で抱える課題を把握することで、効果的な支援の在り方を模索した。
A）看護師などの専門職によるアウトリーチ型相談対応
B）さまざまな世代がかかわる居場所づくり
C）遠隔からの能登半島地震の被災地支援

共に進む仲間を作るための工夫

まちの保健室を開催している「&nurse」と、こどもの居場所づくりをしている「こどもの育ちを支えるたまりばネットワーク（ばネット）」とは、これまでも連携を進めてきていた。「継続的につながる」ことでそれぞれの活動がパワーアップすると考え、今年度は本事業において協働することとした。能登半島支援を行っている「宇都宮大学学生チームCheers.」は、当法人役員が継続的に支援している団体であり、資金や事務作業の面でのサポートが必要であると考え、協働することとした。いずれの団体との協働も、中間支援組織として「様々な活動を通した地域社会におけるつながりづくりを進めたい」との思いから始まっている。

取組の成果

A）&nurse：自立・自律的な運営を通して、活動が定着している。今後は、他団体との連携、役割分担をしながら、活動の幅を広げることも検討していく。
B）ばネット：新しくネットワークを立ち上げ、その活動の一歩として、セミナー、フェスタを開催した。これらのイベントを通して、ネットワーク自体のあり方、目指す目標などをメンバー間で確認することができた。
C）Cheers.：被災地から離れた宇都宮で何ができるかを自主的に考え、キャンドルナイトを実施した。他大学とのつながりも構築され、今後の活動にむけた土台を築くことができた。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人宇都宮まちづくり市民工房
代表者	安藤　正知
設立年月	2005年9月
住所	栃木県宇都宮市平松本町1131-1
ホームページ	https://www.utshiminkoubou.org
メッセージ	市民主体のまちづくり実現をめざして、活動しています。

取組の様子

連携団体A：＆nurse
コミュニティナースとして、健康・子育て・介護など日常のちょっとした不安や悩みを
気軽に相談できる「まちの保健室」を定期的に開催している。

連携団体B:こどもの育ちをささえるたまりばネットワーク（ばネット）
こどもの居場所を小山市内に広げるために、セミナーやフェスタを開催している。

連携団体C：宇都宮大学学生チームCheers.
継続的な被災地支援を目的に活動している。今年度、宇都宮市内で「キャンドルナイト　能登と、繋がる」を実施、12月には「能登ファンを増やそう」プロジェクトのモニターツアーに参加し、現地の大学生と共に被災地の現状を伝える方策を検討した。

地域性を活かしたラジオによる情報発信とつながり作りの取り組み

特定非営利活動法人
じゃんけんぽん

群馬県高崎市を
中心に前橋市など

取組のかたち

つながりづくり
つながりのきっかけづくりのための情報発信

届けたい人たち

世代を問わず、支援が必要な人
支援が必要な人に情報を伝えてくれる人

私たちの軌跡

当法人は介護保険事業・障害者福祉事業等のフォーマル事業と、以下のようなインフォーマル事業を2本柱として活動している。 〇多世代の常設型居場所「近隣大家族」、屋外型居場所「つながる農園」の運営　〇日常的には高齢者宅へ、夏休み等には子どもにもお弁当とコミュニケーションを届ける見守り配食　〇住民同士の助け合い活動と福祉有償運送　〇子どもの居場所「宿題カフェ」・子ども食堂・学習支援などの子ども支援　〇居住支援・認知症伴走支援などの総合相談窓口
こうした様々な活動を通じて、孤独・孤立に対する取組を法人設立から27年間にわたり実施している。

私たちの新たな取組

生活のすべてに車が必要な群馬県では、移動時にカーラジオを聞く人が多い。そして、その多くが県内全域をカバーしている“FMぐんま”を聴いているという地域性がある。そこで本事業では、FMぐんまを通じてメッセージを配信することと、実際に触れ合うきっかけとなるようなイベントを開催した。
イベントは、FMぐんまの人気コーナーを担当し、県内で福祉や環境問題に関する多くの取組を行っているアンカンミンカンの富所哲平氏と当法人理事長による「つながる」ことをテーマにしたトークショーと、子どもから高齢者までみんなで楽しめる童謡コンサートをプログラムとして、群馬県庁県民ホールにて開催した。

私にもできたあんなこと、こんなこと

「孤独・孤立の問題はいつでも、だれにでも起こりうるもの。だからこそ、普段から何気ないつながりをつくっておくことや、いざという時に相談できる場所を知っておくことが重要であり、知らない人にも伝えてあげてほしい。」というメッセージを、私たちはさまざまな形で発信してきた。
その結果、“今、自分には必要が無いけれど、誰かには必要なものかもしれない”と受け止めてくれている人が増え、何かの時に力になるのは日ごろからの関係づくりだということを、地域の人が日常の雑談の中でなにげなく発信してくれている。

取組の成果

「なんでも相談できるっていうから来てみたの。こんなことでもいいのかしら？」とおそるおそる居場所に入ってきてくれた高齢の方がいた。「私たちでわからなければ専門家につなぎますから大丈夫ですよ」、そう答えると彼女はゆっくり話をしはじめた。これはまさに私たちが目指してきた居場所の形。
取り組みを通じて、そんな場所があると知る人がまた1人増えた。「友達にも教えてあげたいからチラシか何かもらっていってもいい？」と声をかけてくれる人もいた。こうして必要な人につないでくれる人、利用する側から発信する側になってくれる人が、少しずつだが確実に増えていると感じている。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人　じゃんけんぽん
代表者	井上　謙一
設立年月	1999年11月
住所	群馬県高崎市棟高町954-8
ホームページ	https://www.jankenpon.jp/
メッセージ	子どもから高齢者まで、障がいがあっても認知症になっても住み慣れた街で自分らしく暮らせますように。

取組の様子

移動子ども食堂・図書館等の居場所作りを複合的に行う駆付け支援

一般社団法人
日本ショーファー協会

埼玉県さいたま市

取組のかたち

気軽に足を運べる
移動カフェ型の駆付け支援を行い
食を通じたつながりづくりを行う

届けたい人たち

多世代(ひとり親家庭・障がい児者・高齢者)

私たちの軌跡

平成10年より、外出が困難な方に食料等を個別にお届けする活動を実施し、本年で27年を迎える。当初は贈答品等の余剰品を、真に食料を必要とされる方に自家用車等を使用して寄贈する少人数のボランティア活動から始まった。令和4年、独自性のある取組み「倉庫を持たない食料配送支援:ジャストインタイム方式による効果的な食料支援」と「独自の交通安全教育」により、埼玉県知事表彰「第1回SAITAMA社会貢献賞」を受賞した。令和5年には取扱量・スタッフ共に極小の眇たる活動ながら、関東農政局に登録され、フードバンクとしての活動も開始した。現在は社協等と連携して効果的な食料支援を実施している。

私たちの新たな取組

活動を続けるうちに真に支援が必要な人に、食料を含めた各種支援の情報が届いていないことを知った。さまざまな理由から社会参加の機会が無い方の状況がわかり、食料支援に加えて複合的・重層的な支援の必要を感じる。新たな取組みとして、キッチンカーを使用した駆付け型の複合支援を考案し、令和6年から新支援を行っている。「移動型カフェ」と銘打ち、周知活動を行い、支援時には「移動フードパントリー」「移動こども食堂」「移動図書館」の機能を付加。移動型の居場所としての認知を目標とした。物的・文化的支援に併せて心理的支援(ゲートキーパー)にも対応している。

“誰でも歓迎”を形にするために

食料や生活用品の受渡し場所だけでなく、お茶を飲んだり本を読むことのできる、立ち寄り易いポップで明るいカラーのキッチンカーを配置し、誰もが気軽に足が向く工夫をした。
キャッチフレーズを「誰でも参加できる きままな居場所 ～ひとりではないけれど集団でもない そんな時と場所をつくります」として、一見カフェに見える移動型複合支援キッチンカーとした。
食料の受け渡しは場所を変えて行う等、受益者に配慮した方法で行い、実施時はゲートキーパー教育を修了したスタッフを配置し、多世代・さまざまな属性が集う場所に相応しい体制とした。

取組の成果

期間中はひとり親家庭の方や高齢者の方等120人に食料・生活用品支援を実施、精米をはじめ約500kgを支援した。移動居場所支援は大学生等が利用され、「誰でも参加できる居場所」としての目的が達成できた。ゲートキーパー活動は4人に行った。
今後はこの移動型支援を継続することに加え、小さくても拠点を設けて安定継続した取組みとしたいと考える。

団体概要

団体名	一般社団法人 日本ショーファー協会
代表者	亀山　敦
設立年月	2010年12月
住所	埼玉県白岡市西四丁目11-5 2F
ホームページ	http://secretary.or.jp
メッセージ	寄り添い、温かみのある支援を、真に必要な人に届けます！

取組の様子

野尻の里から「はじめの一歩」プロジェクト

社会福祉法人
銚子市社会福祉事業団

千葉県銚子市

取組のかたち

交流の場の提供、居場所づくり
ワンストップ相談窓口の設置
多様な関係機関との連携体制の構築

届けたい人たち

多世代
高齢者
単身世帯(日中含む)

私たちの軌跡

特別養護老人ホームの運営
東日本大震災の翌年2012年10月に現在の野尻の地に移転、開設した。地域からは温かく迎えられ、今も支えられている。地域の方々には施設行事等に参加いただき、交流を図ってきた。また地域の祭りやボランティア団体が行う「さくら祭り」等に後方支援として参加し、盛り上げてきた。

私たちの新たな取組

法人として、街なかに空き事務所を借り、居宅介護支援事業所と福祉まるごと相談所をオープン、身近な場所で福祉に関する相談をワンストップで受けられる体制を整えた。
その事業所内に20畳ほどのフリースペースを設け、交流の場の提供、居場所づくりを目的にサークル活動(ちぎり絵・あみもの・プラチナ体操)の場として提供、さらに毎月1回、セミナーを開催している。
サークル参加者の中から、一人暮らしの方の支援について相談があったことをきっかけに、独居や日中独居の方等を対象にお茶会を開催し、交流を深めている。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

最初の一歩はこんなところから:特別養護老人ホームがこの地に移転し10年余、地域のボランティアの方々に本当に助けられた。地域に恩返しがしたいという思いで身近な相談窓口と交流の場を開設した。
気づきが行動に変わった瞬間:サークル活動終了後の雑談の中で、「一人暮らしの方を支援したが、うまく継続できなかった」という参加者の体験談があった。その話題を活かしたいと考え、民生委員や生活支援コーディネーター、サークル・セミナー参加者の協力のもと、誰でも気軽に参加できる「まるごとふれあい会」を企画・開催した。現在では、話をされた方々が中心的な構成員となって宣伝や運営を行っている。

成功のカギとなった工夫とひらめき

共に進む仲間を作るための工夫:地域の祭りの実行委員や地域活動の場面に積極的に参加している。地域の状況を実感として知るとともに、地域活動を支援しながら地域のリーダー的存在の方々と関係を作っていった。
“来る人”から“関わる人”へ:来訪時の活動の合間の会話から、その方の関心事を引き出し、法人担当者も関わりながら課題解決に向けた方向づけをしていく。そして徐々に関わる人となっていただく。一足飛びではなく、まずは人間関係、信頼関係を築くことが大切である。

取組の成果

得られた成果：サークル活動として、編み物サークルは週1回概ね8人、プラチナ体操は週1回概ね9人、ちぎり絵サークルは月1回6人程度が利用している。地域セミナーは、概ね月1回20人程度の方が参加している。2か月毎に開催している「まるごとふれあい会」には、25名程度の方が参加し親交を深めている。多目的ルームの年間延べ利用者は、本年度には1,000名を超え、交流機会の拡大に寄与できたと考えている。まるごと相談に関しても、介護や相続の相談等に訪れ、徐々に浸透しているように感じられる。
今後の目標：現在野尻町という町内での活動を、他の地域に広めていければと考えている。

団体概要

団体名	社会福祉法人　銚子市社会福祉事業団
代表者	理事長　笹本　博史
設立年月	1981年12月
住所	千葉県銚子市野尻町1472番地の1
ホームページ	http://www.choshi-jigyoudan.or.jp
メッセージ	急速な人口減少により地域の活力が失われ、またコロナの影響などにより、地域活動も停滞し、人のつながりが希薄化しつつあった。町単位での小さな活動ではあるが、人のつながりを深めより豊かにし、孤立・孤独を感じない地域づくりの一歩としたい。

取組の様子

地域セミナー

ちぎり絵サークル「和紙の丘」

編み物サークル「あみむめも」

プラチナ体操「カトレア」

まるごとふれあい会（お茶会）

市内の公共施設を起点に「おせっかい」の風土（フード）を拡げる

特定非営利活動法人
フリースタイル市川

千葉県市川市

取組のかたち

フードロス食品を「リレーのバトン」として、
地域のあらゆる主体が有機的につながる

届けたい人たち

地域につながりを持てていない方たち

私たちの軌跡

フードバンクは、「まだ食べられる食品を必要な人へ届ける」という活動だが、その過程には、企業、一般家庭、就労支援団体、ボランティア、学校、子ども食堂や困窮支援団体、自治体など、多様な主体が関わっている。まちづくりNPOであるわたしたちは、フードバンクを「支援する／される」という関係に閉じず、地域の誰もが役割や出番を持って参加できるプラットフォームとして位置づけ、産学官民の網目を重ねながら、孤立する点を線でつないでいくことを目的に活動している。

私たちの新たな取組

市川市は世帯の70%が1～2人暮らしであり、いわゆる東京のベッドタウン。地域活動への参加率が低く、孤立しやすい環境にある。一方、子ども食堂やフードバンクなど、地域活動に関心を持つ市民は多く、これらの「おせっかい」が好きな人材と協力して、誰もが立ち寄りやすい公共施設を入口に、行政や困窮支援団体などの専門家と連携した「二階建て支援」の場づくりや、そこにフードロス食品という名の血液を送り込む心臓のような役割のフードバンクインフラを作ることで、毛細血管のように地域につながりが広がっていく。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

日比谷の結婚式場でバイトをしていた時、毎日、裏口の階段を降り、大量の残飯をゴミ箱に廃棄していた。ふと道路の反対側の道端に、倒れたように横たわるホームレスの人が見えた。こんなに短い距離の間に、大量の食事と、飢えた人がいて、その間には見えない壁がある。法律、制度、リスク、市場、スティグマ、それらは私たち自身が作り出したもの。だからこそ、取っ払ってしまうことだってできる。そんなフラットな場所をつくりたいという想いから、本事業をはじめた。市場価値がなくなった食べ物が、市場経済の外で、お金では解決できない価値を生むことができるということが、フードバンクの一番の面白さだと感じている。

“来る人”から“関わる人”へ

Mさんは単身の生活保護受給者で、フードパントリーで食品を受け取っていた。支援の現場で、スタッフが温かく声をかけ合い、生き生きと活動する姿に触れ、「自分も誰かの役に立ってみたい」と感じるようになったという。視力に不安があるMさんに何ができるかを皆で考え、無理のない役割を用意した。いまでは自宅から1時間以上かけて手伝いに来てくれている。Mさんにとってこの場所は、微力でも誰かの助けになれていると実感できる場であり、社会とつながり、自分の居場所を感じられる大切な時間になっている。

取組の成果

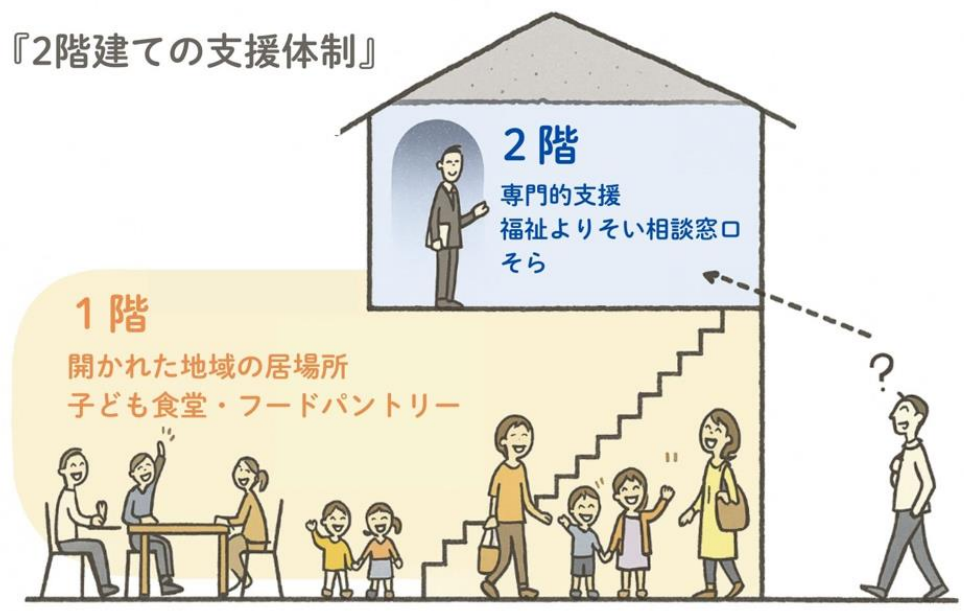
イオンリテールやイトーヨーカドーと協定を結び、千葉県内46か所から集まった寄付食品を、就労支援のワーカーが運び、民間のボランティアが仕分け、市役所をはじめ市内21か所の子ども食堂で「おすそ分け」し、受け取りにきた人たちとつながり、時に行政や福祉専門家が支援し、孤立した点が線でつながり面となっていく、食品を媒介につながりの循環が生まれるプラットフォームを創出した。
フリースタイル市川の5周年イベント「フリスタ万博」では、この循環リレーに参加する各主体が一同に介し、皆で紡いだ「おせっかい」の成果を報告した。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人 フリースタイル市川
代表者	稲村　絵美里
設立年月	2020年10月5日
住所	千葉県市川市塩焼4-1-23
ホームページ	http://fs-ichikawa.org
メッセージ	ひとつひとつの想いをつないで、市川に流れをつくる。

取組の様子

『2階建ての支援体制』



ひとり親家庭同士の交流（パントリーピックアップと同時開催）

特定非営利活動法人
フードバンクふなばし

千葉県船橋市

取組のかたち

交流の場の提供

届けたい人たち

ひとり親家庭のお母さん、お父さん

私たちの軌跡

2018年より船橋市こども家庭支援課、家庭児童相談室、保健と福祉の総合相談窓口さーくる、スクールソーシャルワーカー等の関係機関と連携し、経済的に苦しい子育て世帯を中心に配送による食品支援活動を実施している。その後、2020年4月からは、コロナ禍により経済的に厳しくなったひとり親家庭を対象に、家計を食の面から支援するため、対面による食品支援会（以下パントリーピックアップ）を開催している。パントリーピックアップは船橋市内の2会場で開催しており、10～15種類の食品を無料でお配りしている。現在毎月約80名のひとり親家庭が利用をしている。

私たちの新たな取組

2025年7月からパントリーピックアップの開催に合わせて、事務所内のスペースを活用してひとり親家庭同士の交流会を実施している。交流会は月替わりでテーマを設定しており、テーマごとにライフプランアドバイザーや助産師、弁護士等の専門家をゲストに招き、ひとり親の方々が日頃気になっていることを質問し、語り合える場になるようにしている。これまで開催したテーマは「教えて！子どもの教育費について。みんなどうしてる？」「ちょっと気になる！ティーンエイジャーの性の悩み」「ちょっと弁護士の先生に聞いてみたいこと」「誰かに相談してみたい！私のからだ、私のこころ」など多岐にわたる。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

2025年4月にパントリーピックアップを開催している建物の2階に事務所を移転した。事務所が広くなり、スペースに余裕ができたため、何かできないかと考えた。これまでもパントリーピックアップに来たひとり親の皆さんが孤立せず、横の繋がりを持てる場を作りたいと考えてたこと、また、私たちの活動の仲間には、助産師、弁護士、労働組合長経験のある方等、多彩な人材が揃っていたことから、この「場所」と「人」という大切な資源を掛け合わせることで、「相談もできる居場所」として、ひとり親家庭の交流会をスタートした。

成功のカギとなった工夫とひらめき

交流会に参加するためには何かテーマがあった方が参加しやすいと考え、「ひとり親さんにとって関心が高いことは何だろう？」と考えることからスタートした。教育費や養育費といったお金に関すること、子どもの性教育や自身の健康のこと、仕事のことなど、「誰かと話したいが話せる相手がいない、でもとても気になること」を聞き取りや普段の会話をとおして把握し、私たちの活動仲間の経験やスキルをマッチングした。食品配布をベースにして、その上にテーマ性のある交流の場を積み上げることで、食品支援にとどまらないその先の支援を実施することができていると感じている。

取組の成果

交流会には延べ32名、実人数で24名が参加した。参加者からは「普段、ひとり親であることを周りに明かさないので、同じ立場の人同士で腹を割って話すことができた」、「ストレス解消になった」、「ここで話すことで自信を持てた」、「久しぶりに大人と話せた」という声を得た。参加した方のうち、14名にアンケートを実施。「ひとり親同士の横の繋がりを感じることができたか？」との質問に対し、感じられた9名、感じられない5名という結果となり、孤独・孤立対策に一役買っていることがわかった。一方で繋がりの構築は一朝一夕でいかないことから、今後も参加者のニーズや子育てに役立つテーマを探して交流会を開催していきたい。

団体概要

団体名	NPO法人　フードバンクふなばし
代表者	笹田　明子
設立年月	2018年5月
住所	千葉県船橋市金杉　5-1-12
ホームページ	http://fb-funabashi.com/
メッセージ	船橋市で2018年からフードバンクとして食品を集めて食品ロスに貢献し、あわせて食のセーフティーネットの役割を果たしています！

取組の様子

まちのしごと場づくりプロジェクト

NPO法人
KOMPOSITION

千葉県松戸市

取組のかたち

松戸市で活動する福祉団体に対する、
まちづくりサイドからの人的・情報的資源
の提供、ネットワークづくり

届けたい人たち

女性、ヤングケアラー、ひきこもり状態にある人、
不登校、高齢、障害、貧困経験者など、
孤独・孤立を抱える人びと

私たちの軌跡

「安全で安心できる、住まいと居場所を地域につくる」ことをミッションに掲げ、女性、ひきこもり状態にある人、高齢者、障害のある人、貧困や孤独・孤立を抱える人びと、住居に課題を抱える人びとを対象に、居住支援の活動を行ってきた。具体的には、保証会社や保証人を必要としない形での住宅の提供を行うとともに、入居後の生活支援や仕事づくりに関する支援をあわせて実施している。

私たちの新たな取組

不登校、ひきこもりを経験している子どもや若年層だけでなく、障害者、高齢者、ヤングケアラー、若年性認知症を抱える方など、地域において居場所や社会的関係性の構築に困難さを抱える人々を対象とし、千葉県松戸市におけるまちづくりのネットワークを活かして地域における仕事の場づくり（プラットフォーム）を構築・推進する。具体的には松戸市で活動する福祉団体等に対して、企業とのコラボレーションのプログラムの実施他、まちづくりとして人的・情報的資源の提供、ネットワークづくりの支援を行う。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

令和6年度に「さくら広場」（千葉県松戸市にある子どもの居場所）において、不登校・ひきこもりを経験している子ども、若者を対象に地域における就労支援プログラムの支援を行ってきた。そこで得られた知見やネットワークを活かし、昨年度対象とした①不登校・ひきこもりを経験している子ども・若者だけでなく、②障害者、③孤独・孤立的な課題を抱える層（アドカラーの活動）にまで広げ、地域における孤独・孤立を防ぐ、まちのしごと場づくりのための持続的なプラットフォーム（各々の事業の継続性の担保を図る地域のネットワーク）づくりを行うに至った。

成功のカギとなった工夫とひらめき

上記、②＋③を担うアドカラーの活動に対して、
〇しごと場づくりの創出に際して、不動産・まちづくり会社との協働のもとで、飲食テナントを相場価格の1/10＋売上連動型での貸し出しをおこなった点
〇しごとづくりに向け、地元ブルワリーの瓶ビールのラベル貼り業務を紹介するなど、まちづくりの現場とのコラボレーション支援をおこなった点

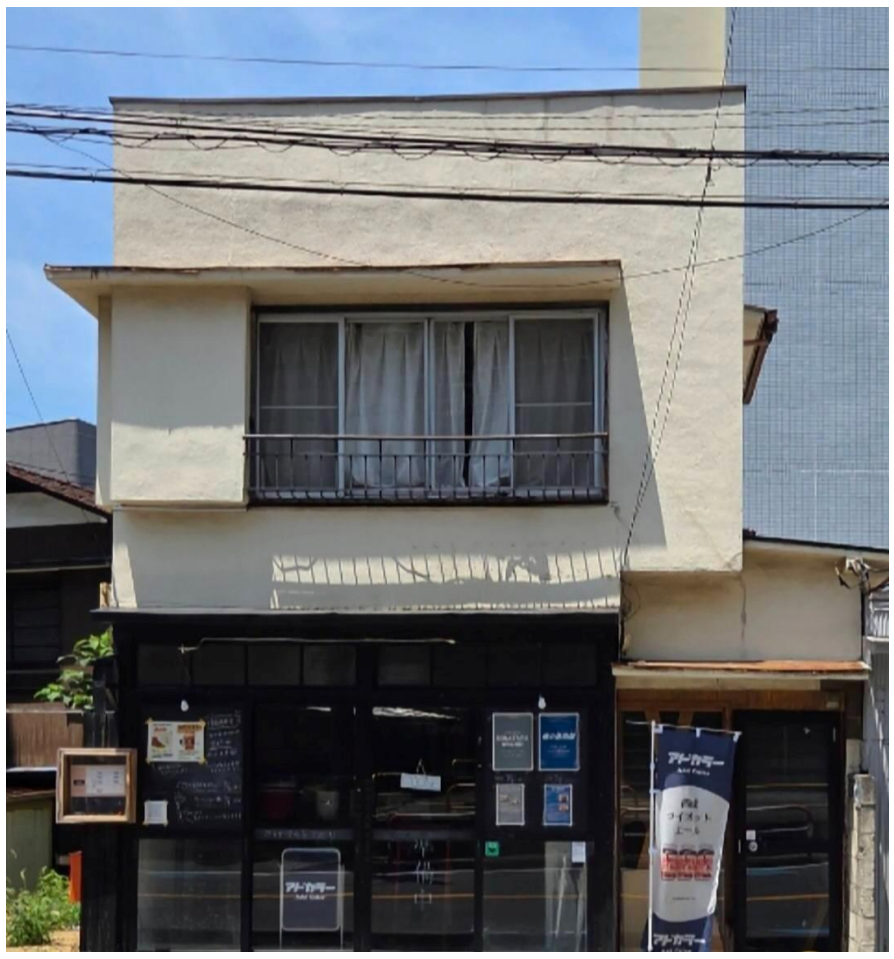
取組の成果

さくら広場（ひきこもり、不登校を経験する人々向けの居場所）、アドカラー（高齢者・若年性認知症・ヤングケアラー等さまざまな経験を抱える人びと等を対象としたしごとづくり）など、松戸市内で孤独・孤立に対する取組を行う地域団体と連携し、各種しごと場づくりのプログラムを実施した。また、松戸市で活動する福祉団体に対し、まちづくりの視点から人的・情報的資源の提供およびネットワーク形成を行った。その結果、地域には当事者が役割を持って関われる軽作業や隙間的な仕事が存在する一方、それらを団体間で十分に共有できていなかったことや、今後の企業との連携可能性等について確認できた。

団体概要

団体名	NPO法人 KOMPOSITION
代表者	寺井　元一
設立年月	2002年11月6日
住所	千葉県松戸市本町20-10 ル・シーナビル7F
ホームページ	https://komposition.org/
メッセージ	関連団体、不動産・まちづくり支援会社株式会社まちづクリエイティブと協働で居住支援を行なっています。

取組の様子



アドカラーの活動
左：店舗
右：提供料理

孤独・孤立の防止につながる福祉のまちづくりプロジェクト

社会福祉法人
九十九里ホーム

千葉県匝瑳市、旭市、銚子市、横芝光町、多古町

取組のかたち

交流の場の提供・居場所づくり、
働くことを通じたつながりづくり、
教育を通じたつながりづくり、
支援者の育成・研修

届けたい人たち

高齢者・中高年者・若者

私たちの軌跡

社会福祉法人九十九里ホームは、昭和の初期に英国人宣教師A.M.ヘンテ女史によって、結核回復期にある方々の保養所として設立されて以来、時代の要請に応えて医療、保健、福祉の総合施設の完成を目標に業務を推進してきた。現在では、医療・福祉・介護・子育て支援の各施設が連携を図りながら地域に開かれた社会福祉法人として、利用者の方々に良心的なサービスを提供している。また、近年は住民が健康を増進し、趣味・ボランティア等の生きがいや地域との交流など、人との関わりを促進する“匝瑳市生涯活躍のまち形成事業”により、地域の人々の日常生活を支える「新しい福祉のまちづくり」に取り組んでいる。

私たちの新たな取組

当地域の高齢者は一人暮らしが多く様々な不安を感じていることから、地域の高齢者が社会の一員であることを認識できる交流プログラムの開発により孤立感の解消を図った。また、交流プログラムで作った作品を地域のイベントで配布する等、高齢者と地域とのつながりをつくった。イベントでは孤独・孤立に関する取組が地域住民に浸透するよう、チラシによる周知も行った。これらに加えて、孤独・孤立対策に取り組む支援者の育成や関係機関との連携強化を目的として、地域の支援者を対象とした研修会を行った。さらに、進路に不安を抱え、孤独を感じやすい若者を対象とした就労支援にも取り組んだ。

共に進む仲間を作るための工夫

地域住民の孤立感の解消を図るための居場所での仲間づくりを月1回行い、参加者同士の交流と社会参加、地域包括支援センターとの連携強化につなげることを目標に掲げて実施した。また、支援者のネットワーク形成を目的に高齢者支援をテーマとした研修会を実施し、20名が参加した。研修の企画にあたっては、事前アンケートで参加者の希望を確認し、それに沿ったものとなるよう工夫した。また、連携相手の「相利評価表」を作成し、行政の福祉計画の実施や、「高齢者の生きがい」、「受託事業の実施」、「市民への周知」、「失業者の孤立防止」等、連携先が「達成したい」と考えることを整理・理解した上で、連携先にアプローチした。

取組の成果

地域住民の集いの場では、レザー・ペーパークラフト等の手工芸を通じて交流を図ることができた。また、落語会や地域のイベントには多数の参加者が集まり、当事業の周知を行ったため、孤独・孤立防止の重要性を地域にアピールすることができた。（集いの場・イベント実施回数：16回、参加者延べ人数：1,121人　）
また、支援者向け研修を通じて孤独・孤立対策の意義等を確認したことで、関係機関と共通の課題意識を形成し、地域における孤独・孤立対策の担い手育成にも寄与できたと考えている。若者を対象とした就労支援は具体的成果がなかったが、進路に悩む学生の支援や失業者の孤立防止の重要性に改めて気づけた。

団体概要

団体名	社会福祉法人 九十九里ホーム
代表者	理事長　井上峰夫
設立年月	1935年10月
住所	千葉県匝瑳市飯倉21番地
ホームページ	https://www.99-home.com
メッセージ	地域の高齢者や進路に悩む若者、仕事を探している人たちを支援することができる、「孤独・孤立の防止につながる福祉のまちづくり」を実践することができた！

取組の様子

地域住民の孤立感の解消を図るために交流の機会につながる居場所づくり。今年度は単なる集まりではなく、参加者同士の交流と社会参加につなげることを目標に掲げて拡大・発展させることとした。

地域住民の集いはアンケートにて希望を聞き取り、行政との連携や管理栄養士による認知症予防を目的に教室などを行い、徐々に住民同士の交流と参加意識の向上につながった。

当初からボランティア講師の指導で行ってきた集いには、毎回約30名の住民が参加してこの会が交流の場として定着してきた。最近は参加者の中から指導者が出て参加者同士の交流が一層深まった。

保育現場における親子の日常見守り強化活動

特定非営利活動法人
フローレンス

東京都、埼玉県、神奈川県、
富山県、京都府、奈良県

取組のかたち

保育現場における親子の見守り強化

届けたい人たち

保育園及び居宅保育事業の保育者と
その先にいる子ども・家庭

私たちの軌跡

2010年、待機児童問題解決のモデルとして小規模保育所「おうち保育園」を開設した。これが後に「小規模認可保育所」として制度化され、全国へ普及したことで、待機児童問題解消に寄与してきた。2019年から社内に保育ソーシャルワーカーを配置。自社が運営する保育園において、困りごとや育児に不安を抱えている家庭を早期に発見し、必要な支援につなげる役割を担っている。さらに、2021年度からは東京23区内の自治体より「保育ソーシャルワーク事業」を受託し、区内各園を対象に、発達や養育に関する相談支援を専門的な助言とともに提供している。

私たちの新たな取組

保育ソーシャルワークの普及に向けたモデル構築のため、2つの取組を行った。
①保育ソーシャルワークにおける「園からの相談対応」から「関係機関との連携」に至る一連のプロセスとノウハウを整理し、可視化。これを基に社外園での相談対応のトライアルを実施する。
②①の成果に基づき、社外園を対象とした『明日からの保育にすぐに役立つ！保護者支援・子育て支援の「知識」を「実践」につなげる研修』を試行。要支援家庭への対応プロセスの全体像や対応のポイントなどを伝える。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

保育園は地域の子育て支援機関として、要支援家庭の見守りや関係機関への橋渡しといった重要な役割を期待されている。しかし、現場では、「どこまでを保育園で担うのか」、「どのように関係機関につなげていくのか」等、園や保育者個人の知識・意識に大きなバラつきがあり、日々模索しながら対応しているのが実情である。こうした状況の中で、自社が運営している園をサポートする中で蓄積した知見を広く還元できるのではと考えた。より多くの保育者や家庭の一助となりたいという想いから、保育ソーシャルワークの普及のため、社外園を対象とした相談対応のトライアル及び研修に取り組むに至った。

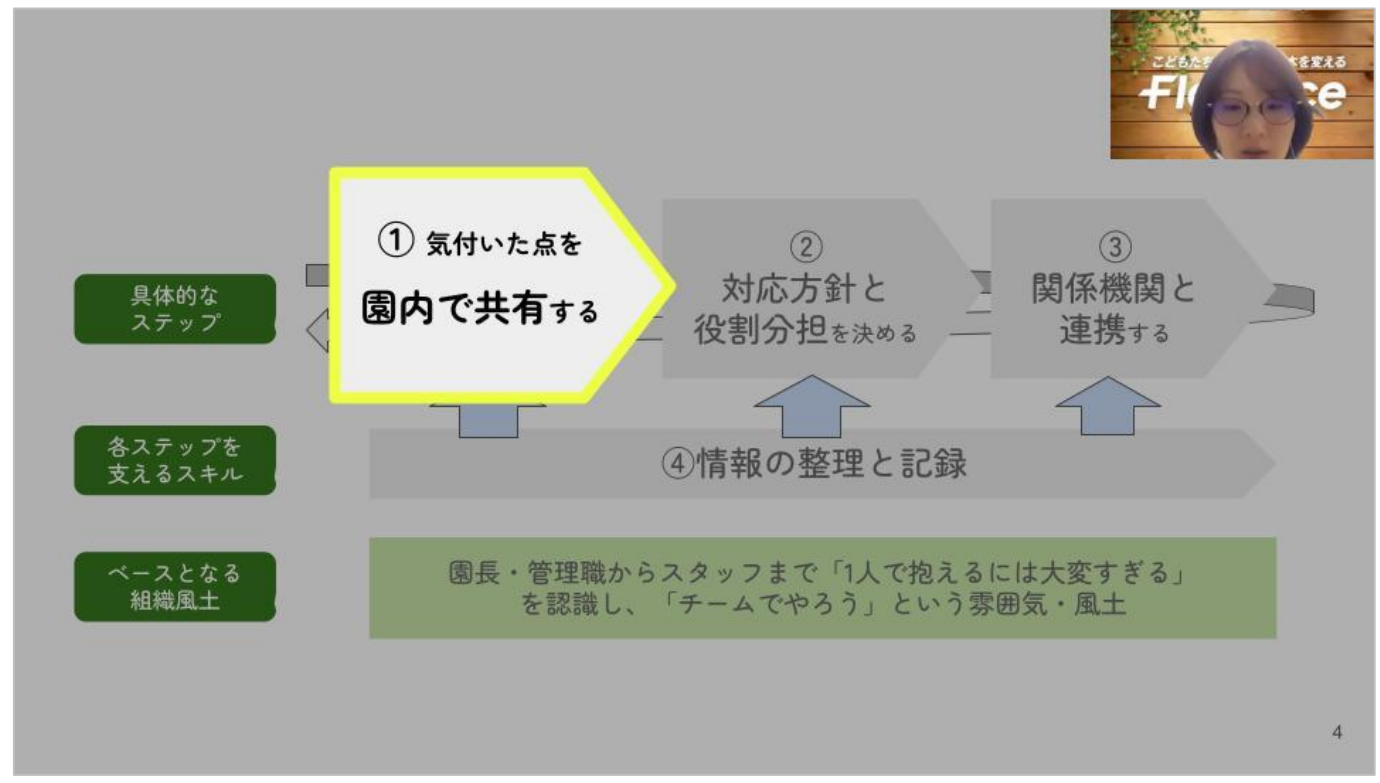
取組の成果

①は、調整が難航し、社外園での相談対応の実施まで至らなかった。一方で対応プロセスとノウハウを整理し、可視化できたことで、従来の取組を体系化し、②の研修の基盤を構築できた。
②は、まずは自社園にて実施。要支援家庭に関する園内の共通理解が進み、保育者の意識変化が見られ、研修の有効性が確認できた。これらを踏まえ、社外園4園を対象に研修を実施し、13名が参加。事後アンケートでは、ソーシャルワークの基礎知識の習得が要支援家庭対応への心理的ハードルを下げること、具体的な対応方法のニーズの高さがわかった。今後は研修後のフォローアップを行い、実践への定着を目指す。

団体概要

団体名	認定NPO法人 フローレンス
代表者	赤坂　緑
設立年月	2003年1月
住所	東京都千代田区神田神保町1丁目14番地1 KDX神保町ビル
ホームページ	https://florence.or.jp/
メッセージ	「こどもたちのために、日本を変えるフローレンス」。日本のこども・子育て領域の社会課題解決に総合的に取り組みます。

取組の様子



定年退職を乗り越えるハイブリッド型孤独・孤立予防プロジェクト

特定非営利活動法人
地域健康プラン

東京都、神奈川県

取組のかたち

退職を契機とした孤立孤独を
予防する新たな介入方法の開発

届けたい人たち

繋がりが職域のコミュニティに偏っており、
地域コミュニティとの接点が乏しい人たち

私たちの軌跡

当法人は、地域住民・研究者・医療従事者などの専門分野のメンバーが集まり、健診業務のサポートや予防医療プログラムを提案する取組として山形県高畠町や神奈川県で事業を行っている。また、介護予防の領域でも、地域の高齢者、単身者に対する生活支援（居場所づくりや地域サロンの立ち上げ支援など）に取り組んでいる。その中で、地域の居場所に参加する方の多くは女性であることに課題意識を持ち、居場所への参加が希薄な高齢者が孤独・孤立に陥ることを事前に防ぐ必要性を強く意識し、職域と地域を越境するハイブリッドなプログラムの実施を開始した。

私たちの新たな取組

定年退職というライフイベントに着目し、特に就職氷河期～団塊ジュニア世代（40～60代）を対象に退職前に社会的孤立の予防をしながら就労支援と地域コミュニティへの参加・社会貢献活動による価値観の変化を組み合わせたハイブリッドの孤独・孤立対策を行うことを目的に事業を実施する。
具体的には、オンラインにて人生100年時代を意識し、自らのこれまでと価値軸に気づきを得たうえで、新たな活動の一歩として地域コミュニティへの参加を促すプログラムを提供する。

共に進む仲間を作るための工夫

公衆衛生や介護予防、居場所づくり等の知見を横断的に提供するという専門性を基盤に、既存のネットワークを活用した。神奈川県をはじめとする行政や活動の対象となる社員を抱える企業、地域の活動を支える中間支援組織等と連携しながら、「退職を契機とした孤独孤立」という課題を共有し、解決を目指す仲間として、各自の広報媒体や情報伝達手段を使い、参加者の募集を行った。
また、併行して今後、本プログラムを導入する可能性のある企業の人事部門や行政の担当部署ともディスカッションをし、今後の事業化・自走化の検討を進めた。

取組の成果

既存のネットワークを活かし、連携した成果もあり、計56件の申し込みを得ることが出来た。
一方でプログラムがオンラインが中心だったこともあり、歩留まりが低く、プログラムを完遂できた人数は17名に留まった。今後はプログラムの完遂率を高めるための初回プログラム実施時の工夫などが求められる。
また、参加者のうち、12名は何らかのボランティアや地域活動に参加しており、動機づけに関しては概ね狙い通りの効果を確認できた。今後は取得したアンケートを精緻に分析することで、どのような経歴や特性を持つ方に特に効果があるかなどを明らかにし、今後のプログラム実施や訴求先の検討に繋げていく。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人　地域健康プラン
代表者	成松宏人
設立年月	2015年2月
住所	山形県山形市七日町２－７－23とんがりビル3階／神奈川県藤沢市村岡東 2-26-1 湘南ヘルスイノベーションパーク
ホームページ	http://tkk-plan.com/
メッセージ	私たちはがんや生活習慣病予防に関する研究と教育に関する知見や成果を地域に実装するために山形県で立ち上げられた。2019年からは神奈川県藤沢市の湘南アイパークに入居し、介護予防や孤立孤独といった課題にも取り組んでいます。

取組の様子